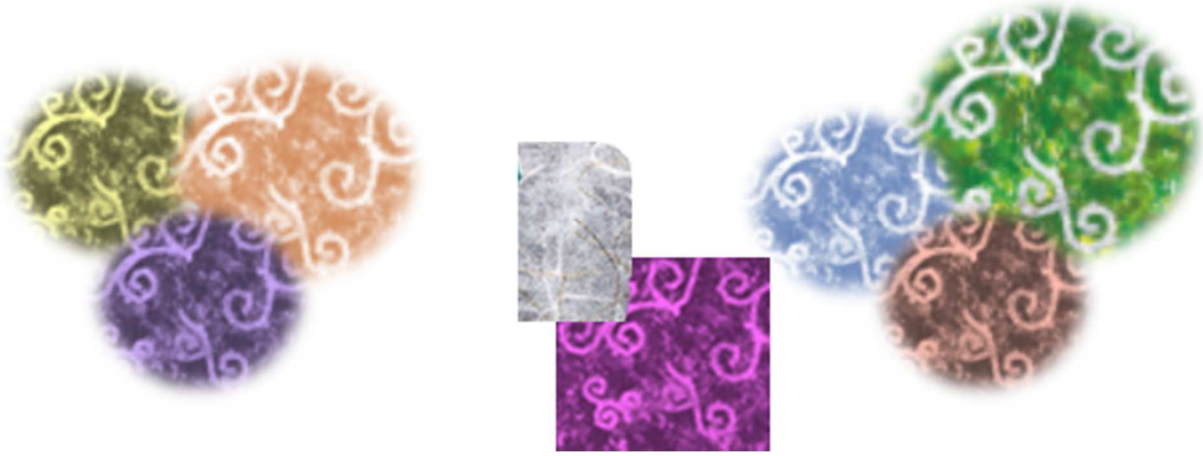
明石の史跡（１８）糸からくり師作右衛門



須磨寺は、享保１８年（１７３３）の２月７日より４月８日までの２か月間、平敦盛５５０遠忌の追善開帳を実施（以下特に出典を明記しない場合は、『須磨寺「当山歴代」』による）。敦盛が１６歳の生涯を閉じたのが、寿永３年（１１８４）２月７日のことで、俗世間の計算とは少し異なるようである。

ご開帳に先立つ２月６日、敦盛の石塔前（神戸市須磨区一の谷町５丁目）において回向をしている。余談ながら、この敦盛の石塔（五輪塔）は、慶長大地震の際、浜辺まで移動したといわれ（当山歴代）、今回の阪神淡路大震災でも、空輪が国道２号線で確認されたとの報道がある。

上記２か月間というものは、多くの参詣人で境内は賑わっており、これら参詣人を対象に、大坂より辻打芝居などが出張する。なかでも道頓堀の九平次なるものは、２４～５人の編成で、芝居を披露している。これらにまじって、明石より参加の作右衛門なるものが、「糸からくり」を興行したことが記録されている。

「からくり」というのは「糸のしかけであやつって動かすこと。また、その装置」（広辞苑）のこで、作右衛門の興行した「糸からくり」は、文字通り糸で人形を動かしたものであることがわかる。

絡繰人形芝居の元祖は、寛文年間（１６６１～７２）に大坂の道頓堀で興行した竹田近江といわれ、彼は時計技術者であった。天文２０年（１５５１）、ザビエルが大内義隆に機械時計を贈って以来、多くの宣教師たちが、機械時計をもたらした。１６世紀末には、津田助左衛門らの時計職人も誕生をみた（小泉和子著『道具と暮らしの江戸時代』１６６－７頁）。明石の作右衛門も、と時計技術の伝承者の一人であったかも知れない。

日本歴史学会会員 茨木 一成